

目的 香り（香りの精、香油）が人々の精神に様々な影響を与えることは、古くからよく知られている。近年、科学技術の進展に伴い、人間をとりまく生活環境は著しく変貌、人々の日常生活は、高ストレスにさらされていると言われて久しい。このような高ストレス社会の深刻化に対応する形で、最近、日本でもアロマセラピー（芳香療法）が注目され、その応用に関心が高まっている。アロマセラピーは、その経験的治療行為が、現在、人々の注目を集めてはいるが、一方、その効果を客観的に評価する方法すらないのもアロマセラピー研究の現状である。そこで、本研究では、香り（今回は、バンダ、ローズマリー、リタール3種の香油）を客観的に評価する手法の確立を目指した。

方法 まず、香りの評価に『作業』の視点を導入（具体的には、クレペリン精神検査・踏台昇降運動・環境音聴取の3つの作業）。次に、それらの『作業』に対し、『有効』もしくは『効果あり』と判定できる香りのスクリーニング手法を開発することにした。

結果 最終的には、官能評価法と生理計測法（簡易脳波計（IBVA 脳波計））に基づき、香り（香りの精、香油）を評価、作業に有効な香りをスクリーニングする客観的手法を確立できた。将来的には、本法によりスクリーニングした『香り』を、臨床領域（精神治療、リハビリ治療）に、また、健康科学領域に応用したい。